TOPICS 3 業界グループの活性化に向けた活動を支援 ～平成29年度事業を振り返って～

トピックス ● SPECIAL FEATURES ●

本会では、平成29年度の新規事業として、法人化されていない任意グループが行う事業活動の活性化や課題解決を通じて将来の組合設立に向けた支援を目的とした「連携組織化促進事業」を実施しました。本号では、本県の特産品である「きりたんぽ」と「ギバサ」に関連した活動を行っているグループへの支援内容についてご紹介します。

＜秋田名物本場大館きりたんぽ協会（大館市）＞　代表者：石川　博司、会員数：35名

［事業活用のきっかけ］

「きりたんぽ」は、本県を代表する伝統的な郷土食であるものの、当協会が中心となった認知度の向上や生産・流通・販路拡大に向けた取組が課題となっていました。そこで、本場大館きりたんぽのブランド化に向けた研修会を開催することで、協会の今後の在り方について検討する契機としました。

［取組のポイント］

地域ブランドに関する制度（GIや地域団体商標制度）の理解を深めることで、きりたんぽのブランド化に向けた取組イメージを協会内で共有することができました。また、他県で地域ブランド化に挑戦する「奥美濃カレー」の事例から、需要拡大に向けたプロモーション活動や外部関係者との連携強化などについて学びました。

［今後の展開等］

きりたんぽのブランド化については、課題の抽出や取組方針の決定など、今後もグループ内で検討を重ねながら、「本場大館きりたんぽ」の認知度向上に向けて取り組んでいく予定です。

また、ネギやゴボウ、セリ、マイタケ等の共同購入を目的とした協同組合の設立の可能性について考える会員もいることから、今後も協会事務局と連携し、組織力及び活動の強化に向けたフォローを実施します。

［きりたんぽ鍋（写真提供：大館市）］

＜あきたのギバサ研究会（秋田市）＞　代表者：夏井　勝博、会員数：6名

［事業活用のきっかけ］

秋田では、古くからアカモクをギバサと呼び食べる習慣がありますが、近年、アカモクに含まれるフコイダンの抗酸化作用や免疫力向上などの効用に注目が集まり、全国的に需要が爆発的に伸びています。

そこで、県内でギバサを加工する事業者を中心に構成される「あきたのギバサ研究会」では、認知度を全国区に引き上げ、地元産ギバサの消費拡大を図ろうとする動きが活性化しつつあったことから、同研究会を支援する秋田県総合食品研究センターと連携することで、将来の法人化を見据えた支援を実施しました。

［ギバサ（写真提供：あきたのギバサ研究会）］

［取組のポイント］

本会事業の活用により、専門家から地域産品のブランド化に向けた取組紹介やアドバイスをいただくことで、今後の活動の方向性を示すことができました。

また、他県において「アカモク」を全国展開している協同組合の事例から、商品開発やターゲット先の選定、素材が持つ優れた機能性の効果的な発信により付加価値を高める取組などを学んだことで、グループとしての活動意欲は更に高まりました。

［今後の展開等］

「健康」「美容」をキーワードに、ターゲットを絞り込みながら成分分析や研究成果を上手く活用した販売戦略の立案等、今後も積極的なグループ活動が期待されます。本会でも本格的な活動に向けた支援や情報提供等を行っていく予定です。